様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １３ 日現在

機関番号：３４３０９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１６９４０

研究課題名（和文）通時期的地域横断的視座に基づく古墳時代土器の時代的特質の解明

研究課題名（英文）A diachronic and interregional approach to characterizing Kofun-period pottery

研究代表者
中久保　辰夫（NAKAKUBO, Tatsuo）

京都橘大学・文学部・准教授

研究者番号：３０６０９４８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、考古学の基礎資料でありながらも、統合的な整理が不十分であった古墳時代（西暦３世紀半ば～７世紀）の土器について、時期、地域、器質を横断して時代的な特質を解明することを目的として行った。
研究の結果として、古墳時代土器には、土師器と須恵器の儀礼用土器、須恵器の貯蔵器が、網の目状に日本列島広域に共有される「広域共有性」、日本列島内外の政治変動に呼応して儀礼用土器の様式変動が起こる「更新性」、「広域共有」と「更新」によって維持・増幅される「中心‐周辺関係」という特質があるという理解を提示した。そして「饗宴」論を導入し、古墳時代の事例を国際比較する可能性も本研究によって見出すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古墳時代土器を器質や地域を横断して通時期的に分析し、その特質を「広域共有性」、「更新性」、「中心‐周辺関係」としてまとめた点に、本研究の学術的意義があると考える。研究の成果として、古墳時代には、巨視的にみれば、土器様式の発信源となった中心地が存在し、儀礼の更新により、同じ儀礼を採用する限りにおいて、常に中央の動向に目を配る必要が生じたことが中央と周辺地域の関係を維持する動力になったという理解を提示した。また、様々な様態のアウトリーチ活動に加え、日本語版と英語版のウェブサイトの構築によって、基礎情報や研究成果を広く社会に発信したことも本研究の意義として特筆したい点である。

研究成果の概要（英文）：This research was conducted in order to clarify the characteristics of Kofun-period (mid-3rd century to 7th century AD) pottery, which, albeit being essential to archaeological inquiry, has not received sufficient comprehensive treatment. The approach of this research was to conduct analyses that cut across divisions of temporal phase, region, and style. The major areas clarified by this research include the widespread commonality seen across the Japanese archipelago in haji and sue ritual pottery and sue storage vessels and stylistic innovation seen in ritual pottery aligning with internal and external political change. This widespread commonality and innovation allowed for the maintenance and expansion of center-periphery relations. Additionally, through an analysis of feasts, it was suggested that the Kofun period offered an illuminating case study for comparison with other regions throughout the world.

研究分野：考古学

キーワード：土器　古墳時代　土師器　須恵器　韓式系軟質土器　土器編年　窯業技術　饗宴

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

古墳時代の土器研究は、膨大な出土資料と精緻な型式学的研究を基礎として、古墳や集落の変遷、日本列島内外を含めた地域間関係の把握、葬送儀礼の復元、技術移動など、古墳時代史の中で基礎的な役割を担ってきた。しかしながら、酸化焔焼成の土師器と還元焔焼成の須恵器を中心に構成される古墳時代土器について、焼成方法の違いによる器質を横断した研究は十分になされていなかった。土師器は古墳出現期に研究関心が集中し、また須恵器は朝鮮半島との関係や技術移動に焦点があてられるなど通時期的な把握も検討の余地がのこされていた。さらに、研究の細密化が進展したことにより、かえって全体像の把握が困難となっている。研究の精緻化は歓迎するべきことであるが、古墳時代土器の特質をほかの時代や世界各地と比較する上では障壁が存在していた。

２．研究の目的

上述した研究状況を打開するために、本研究は、これまで統合的な整理が不十分であった古墳時代の土器について、時期、地域、器質を横断して時代的な特質を解明することを目的とした。

研究遂行のために、古墳時代土器の時代的特質は（１）儀礼用土器が広域展開する「斉一性」、（２）前期、中期、後期という節目で土器の器種構成や意匠に大きな変化がある「更新性」、（３）「斉一性」と「更新性」によって維持される「中心–周辺関係」に要約できるという仮説を立て、研究期間の４年間を通じて、この検証作業を行うこととした。

３．研究の方法

研究は、上に述べた３つの特質に対応するように、３つの研究テーマをたて、相互に関連付ける資料調査・分析を中心に進めることとした。

【研究テーマ１】土師器・小型丸底土器、須恵器・瓿といった儀礼用土器に着目して、集成作業を行い、分布の実態を通時期的に把握し、「斉一性」について精査する。さらに儀礼用土器が広域に共有される現象について、比較考古学的観点からその背景を考察する。

【研究テーマ２】近畿地域を中心に既往の編年研究を再検討し、各時期の韓半島各地における土器様相と比較することで、「更新性」の背景を韓半島系渡来文化受容の観点から精察する。編年上の鍵となる新出資料の熟覧・実測とともに、韓半島における土器資料調査、最新の調査成果報告書等の文献収集などを具体的な作業とした。

【研究テーマ３】新たな儀礼用土器の刷新と発信の中核となる近畿地域を中心に、特に須恵器の受容と波及に着目し、須恵器を中心に「中心–周辺関係」を把握する。この上で、須恵器の色調分析など、新たな研究手法を導入した。

以上に加えて、研究活動として国内外の学会・ワークショップ、シンポジウムで成果を発表し、議論や討論の中で仮説の妥当性を吟味することとした。

４．研究成果

（１）古墳時代土器の広域共有性と重層構造

研究テーマ１について、2016 年に土師器・小型丸底土器、2017 年に５世紀前半の須恵器窯跡、2018 年に５世紀から６世紀にかけての須恵器窯跡の分布について実態を把握し、各時期における儀礼用土器やその生産遺跡の広がりについて検討した。

土師器の小型丸底土器、須恵器の瓿は、東北南部から南九州の範囲で出土する。学史的には、土師器・小型丸底土器の「斉一性」が論じられてきたが、実態としてはその出土傾向が地域や集落によって異なり、さらに細部形状や製作技術に地域色を看取できる。須恵器窯も同様に、５世紀前半には北部九州から瀬戸内、東海、東北に展開するが、５世紀後半には瀬戸内の須恵器窯が減少し、山陰や北陸に窯数が増加するなど、時期によって分布傾向が異なり、それぞれに地域色がある。したがって、巨視的には共通性を認めうるが、微視的には生産や消費の結節点が変動する。こうした意味から古墳時代の儀礼用土器は、網目状の「広域共有性」を特質とすると表現した方が穏当であると考えるに至った。

一方で、古墳時代土器の有する「広域共有性」は、須恵器の源流となった韓半島南部の陶質土器と比較すると特異さが際立つ。韓半島南部においては金官加耶、阿羅加耶、小加耶といった加耶諸国、新羅、百済、栄山江流域など、異なる様式圏が存在し、それぞれの主要な供給域は 100 ～ 200 ㎞と比較的狭い。供給域が直線距離にして 1300 ㎞を超す須恵器は、東アジア世界の中においても顕著な特質をもっているといえる。

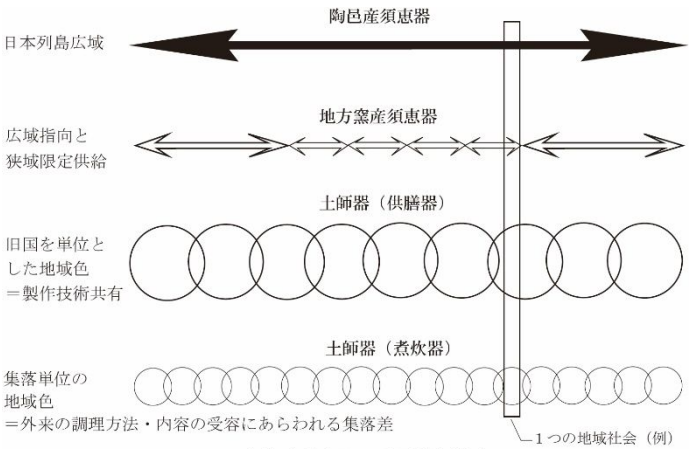

図１　古墳時代土器の重層構造模式図

また、古墳時代土器は、５世紀から６世紀には、日本列島広域に供給

された陶邑窯の須恵器、広域指向と狭域限定供給の地方窯産須恵器があるが、土師器の供膳器には旧国を単位とした製作技術共有という意味での地域色がある。また韓式系軟質土器という韓半島由来の新たな煮炊器の受容には集落差が顕在化する。このように古墳時代土器には、重層構造があることを示した点も、本研究の成果である。

国際比較としては、2016 年、2017 年にアメリカ考古学の土器研究者とともに近畿地域の遺跡踏査を行い、日本の土器研究に関して意見交換し、研究発信戦略を構想した。2016 年７月には、東アジア考古学会（於：ボストン大学）において発表し、2019 年９月には、アメリカ合衆国カリフォルニア州立大学ロングビーチ校でワークショップを開催し、議論を深めた。その結果、現段階の土器研究は叙述的、説明的であり、さらなる国際発信のためには、より広域共有の背景を追求する視座とそれを検証する理化学的分析の必要があると認識することとなった。

こうした点も踏まえ、背景を考える手掛かりとして、国家形成期における饗宴にかんする比較研究の導入を試みた。古墳時代において日本列島広域で共有される土器は、儀礼用土器であるが、より厳密には飲食儀礼や供献に関わるものが主体である。また酒造や醸造に関わると推測できる須恵器大甕も波及力が高いことが内容量の分析とともにわかった。近年、国家形成期において正統性の承認や権力への同意を獲得するために、エリート層が饗宴を戦略的に利用することが世界各地の事例で論じられている（Bray, T.L.（ed.）2003. *The archaeology and politics of food and feasting in early states and empires*. Springer.）。古墳時代土器の有する「広域共有性」もまた、この研究潮流において１つのモデルとして貢献可能であるという展望を本研究で育むことができた。

（２）既往編年の再検討と検証作業の必要性

研究テーマ２について、課題となる時期の土器編年研究に関して、奈良県布留遺跡、大阪府津堂遺跡、寺山南山古墳、大石古墳、芝塚古墳、兵庫県小戸遺跡、前田遺跡、野々池７号墳、黄金塚古墳、滋賀県南畑古墳群、和歌山県楠見遺跡、岩橋千塚古墳群、愛知県東山窯、志賀公園遺跡、岡山県神明遺跡・刑部遺跡、島根県出雲国府跡、夫敷遺跡などで資料調査を実施した。

また韓国で土器資料熟覧のための資料調査（杜谷古墳群、于巨里土器生産遺跡、余草里遺跡、夢村土城、石村洞古墳群、甘一洞古墳群等）を行った。大阪府久宝寺遺跡、蔀屋北遺跡、持ノ木古墳、奈良県新堂遺跡から出土した韓半島系土器を、韓国の同世代の土器研究者と熟覧し、系譜や模倣度合いを議論できたことも研究推進の一助となった。

この結果、古墳時代土器の「更新性」の中には刷新ともいうべき画期があり、その背景には、大規模古墳群の築造地の移動現象といった列島内の政治変動に加えて、韓半島系渡来文化受容が大きく作用することを確認できた。具体的には古墳時代中期における須恵器の導入、古墳時代後期における須恵器意匠変化である。また、須恵器の二重口縁壺など日本列島独自の意匠や器形の採用がみられることも明確となった。

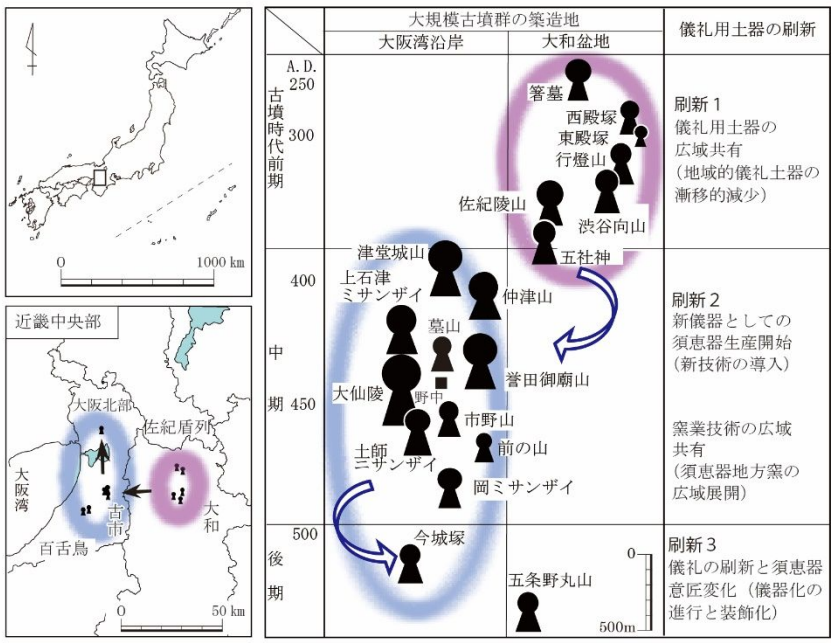

図２　近畿地域における政治変動と土器様式の更新性

なお、研究当初では予期していなかったが、本研究において大阪府陶邑窯跡群出土資料を対象に考古地磁気方位・強度計測等を推進した。さらに、地球電磁気・地球惑星圏学会第 140 回総会や第 13 回人間文化研究情報資源共有化研究会において古墳時代土器研究の現状と課題を発表したことで、学際的な研究展開についても展望をもつことができた。ただ、こうした場での議論を通じ、土器編年の暦年代化において理化学的分析の実施があまりにも少ないことを痛感することにもなった。学際的な理解を深めるためにも AMS 放射性炭素年代測定も含めた事例増加が課題である。古墳時代土器編年の暦年代化が、複数の理化学的年代測定によって検証され、より精緻になれば、「更新性」の背景について確度の高い省察が可能と考える。

（３）技術移動からみた中心–周辺関係の再検討

「広域共有性」と「更新性」にみえるように、古墳時代の土器には常に発信源となった中心地

域が存在する。そして、その発信源は微視的には近畿地域内における主導勢力の本拠地へ移動したが、全体としては一貫して近畿地域中央部に存在した。「中央で創出された儀礼とその道具である土器は、刷新され、また幾度も更新されることにより、周辺各地は同じ儀礼を採用する限りにおいては、常に中央の動向に目を配る必要が生じた」という新たな理解を提示したことが、本研究の特徴の１つである。

この「中心–周辺関係」を考察するうえで、生産遺跡から貴重な手がかりを提供するものは、須恵器の技術移動の実態であり、本研究では大阪府陶邑窯跡群、東海・東山窯、播磨諸窯を中心に分析を進めた。須恵器の技術伝習は、「労働力の提供、あるいは技術の習得を目的として中心の生産地に赴き、一定程度生産に従事したのちに元の場所に戻って生産を行う」帰郷型が想定可能である（菱田哲郎 2005「須恵器の生産者―五世紀から八世紀の社会と須恵器工人―」『列島の古代史』４　人と物の移動　岩波書店）。しかし、地域色のある初期須恵器は確実に存在するので、地方での開窯にあたって、帰郷後に陶工があらたな工房をおこして、そこで伝習したという「帰郷伝習」型と位置付けた。この点は、上番・下向をうかがわせる埴輪生産とも整合的である。古墳の造営およびその構成要素に、技術を介した中央と地域の関係性が明示されている。

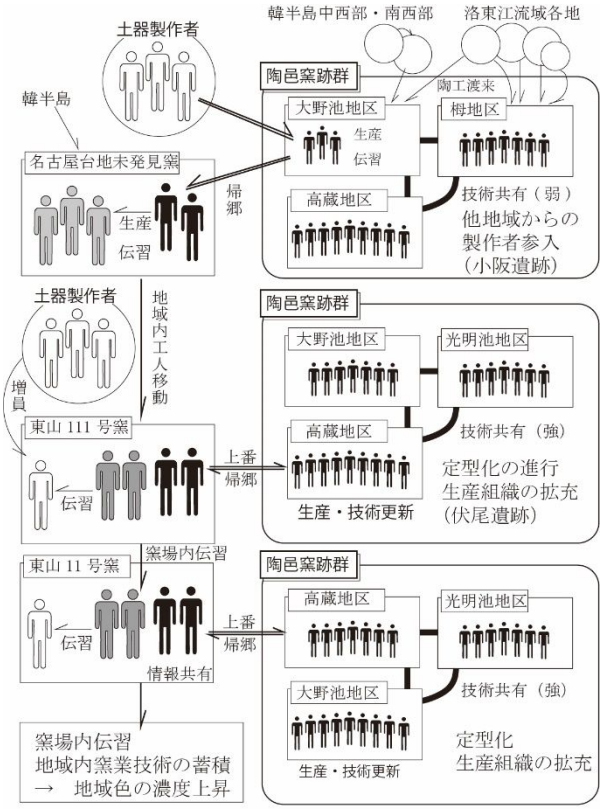

図３　須恵器の技術移動に関する模式図

また、窯尻付近で焼成された須恵器には、土師器のような色調がみられる場合がある。この点は、須恵器模倣を峻別するうえで重要な情報であるが、これまで実証的に検討されてこなかった。しかし、桜井谷２－２号窯（大阪府豊中市）の発掘調査によって、窯天井崩落により焼成時の須恵器がそのまま残存した稀有の状況が検出された。しかも個々の須恵器の出土位置は正確に記録され、窯内の焼成位置によって色調がどれほど変化するのかといったことを把握することができる条件がととのっていた。そこで、出土杯身・杯蓋全点の色調を計測した。この結果として、６世紀代の須恵器生産では、窯内の位置によって土師器に近い焼成となるものがあることが明確となった。その理由は、重ね焼きを行い、多量の杯身・杯蓋を甕と甕のあいだに詰めて、一回の焼成での量産化をはかったことで、須恵器色調や焼成の均一性が失われたためである。多量生産を指向しつつも、それが窯業技術の制約によって実現できなかった点を看取できたことも成果の一端としてあげられる。

（４）成果の公開・社会還元

以上の研究成果は、論文や図書、資料集として公表し、国際学会、国内外の研究会、ワークショップ、シンポジウムで発表し、議論や討論を通じて、仮説の妥当性を吟味した。

日本の古墳時代土器研究は、熟達した遺物観察眼に支えられて、精緻な研究がおこなわれているが、概説的なホームページはほとんどない。そこで、基礎情報と研究成果を国内外に広く発信するために、日本語版、英語版のウェブサイトを構築したことも本研究の成果である。加えて、『野中古墳と「倭の五王」の時代』（大阪大学出版会）の英書化によって一部成果を刊行したことにより、国際発信に幾許かの貢献をすることができた。

本研究成果の社会還元として、市民講座、講演会、読書会、中学生向けのワークショップ開催や市民向け遺跡ウォーキング、資料館などでの展示解説に加え、料理教室と講義を組み合わせた特色ある市民講座アカデミクッキング「作って、学んで、食べて！三度おいしいドキドキ（土器土器）考古学」の実施など、特色あるアウトリーチ活動も積極的に行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 中久保辰夫	４．巻 －
２．論文標題 須恵器生産と地域社会の展開	５．発行年 2020年
３．雑誌名 古代学研究会2019年度拡大例会・シンポジウム「地域社会の展開と手工業生産―埴輪生産遺跡と集落・古墳の対比から―」	６．最初と最後の頁 49－68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中久保辰夫	４．巻 217
２．論文標題 百済・栄山江流域と倭の相互交流とその歴史的展開	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	６．最初と最後の頁 115－150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中久保辰夫	４．巻 －
２．論文標題 近畿地域における須恵器の受容と普及－古墳時代の饗宴と土器生産－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 考古学研究会第２回合同例会『須恵器受容・普及の実態』発表資料	６．最初と最後の頁 7-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中久保辰夫	４．巻 711
２．論文標題 古墳時代の近畿地域における渡来人と土器	５．発行年 2018年
３．雑誌名 考古学ジャーナル	６．最初と最後の頁 10-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高田貫太・中久保辰夫	4．巻 142
2．論文標題 古墳からみた須恵器の変容　朝鮮半島	5．発行年 2018年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 43-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中久保辰夫	4．巻 Ⅲ
2．論文標題 土師器直口壺と古墳時代土器の特質	5．発行年 2018年
3．雑誌名 待兼山考古学論集	6．最初と最後の頁 315‐326
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中久保辰夫	4．巻 －
2．論文標題 物部氏の権力基盤―近年における布留遺跡の研究成果―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ここまで判った物部氏　考古学の調査研究成果から	6．最初と最後の頁 67-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中久保辰夫	4．巻 23
2．論文標題 初期須恵器の地域色と技術移動に関するノート	5．発行年 2017年
3．雑誌名 考古学フォーラム	6．最初と最後の頁 64-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中久保辰夫	４．巻 －
２．論文標題 古墳時代後半期における土器研究の現状	５．発行年 2016年
３．雑誌名 考古学研究会関西例会200 回記念シンポジウム「土器編年研究の現在と各時代の特質―須恵器生産の成立から終焉まで―」発表要旨集	６．最初と最後の頁 １-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　8件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 中久保辰夫
２．発表標題 須恵器生産と地域社会の展開
３．学会等名 古代学研究会2019年度拡大例会・シンポジウム　地域社会の展開と手工業生産―埴輪生産遺跡と集落・古墳の対比から―
４．発表年 2020年

１．発表者名 中久保辰夫
２．発表標題 須恵器大甕の容量と酒造
３．学会等名 考古学研究会関西例会第221回例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山本裕二・北原優・畠山唯達・中久保辰夫
２．発表標題 陶邑窯跡出土土器片からの考古地磁気強度推定
３．学会等名 第146回地球電磁気・地球惑星圏学会講演会
４．発表年 2019年

１．発表者名 NAKAKUBO Tatsuo
２．発表標題 Pottery of the Kofun Period: Measuring pottery and reconstructing ancient history
３．学会等名 Special Workshop on Archaeological Approaches to Ancient pottery
４．発表年 2019年

１．発表者名 中久保　辰夫
２．発表標題 近畿地域における須恵器の受容と普及－古墳時代の饗宴と土器生産－
３．学会等名 第２回考古学研究会合同例会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中久保　辰夫・木村　理
２．発表標題 地域報告　播磨
３．学会等名 中国四国前方後円墳研究会　第21回研究集会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中久保辰夫
２．発表標題 久留美、神出、魚住窯跡群と 東播東部の須恵器生産
３．学会等名 第19回播磨考古学研究集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中久保辰夫
２．発表標題 日本古代土器編年研究の現在と考古学が扱う時間幅
３．学会等名 第13回人間文化研究情報資源共有化研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中久保辰夫・岩越陽平
２．発表標題 須恵器の焼成と色調分析―大阪府豊中市桜井谷２－２号窯を事例として―
３．学会等名 韓式系土器研究会・土窯会　共同研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 中久保辰夫
２．発表標題 考古学的方法論に基づく古墳時代土器編年とその課題
３．学会等名 第146回地球電磁気・地球惑星圏学会講演会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 NAKAKUBO Tatsuo
２．発表標題 Social change and the introduction of continental craft technology
３．学会等名 Seventh Worldwide Conference of the Society for East Asian Archaeology（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 中久保辰夫
２．発表標題 古墳時代後半期における土器研究の現状
３．学会等名 考古学研究会関西例会200 回記念シンポジウム「土器編年研究の現在と各時代の特質―須恵器生産の成立から終焉まで―」
４．発表年 2016年

〔図書〕　計4件

１．著者名 中久保辰夫	４．発行年 2017年
２．出版社 大阪大学出版会	５．総ページ数 334
３．書名 日本古代国家の形成過程と対外交流	

１．著者名 Teruhiko Takahashi, Tatsuo Nakakubo, Joseph Ryan, Naoya Ueda eds	４．発行年 2016年
２．出版社 Osaka University Press	５．総ページ数 105
３．書名 Nonaka Kofun and the Age of the Five Kings of Wa：The Government and Military of 5th-Century Japan	

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本古代土器の基礎知識　https://haji-sue.jp/,https://ancient-pottery.jp
考古遺物の中の女性１ 日本古代の性別分業と土器生産（１） https://www.tachibana-u.ac.jp/research_area/general_academic/iwhc/publication/pdf/chronos_40.pdf
考古遺物の中の女性２ 日本古代の性別分業と土器生産（２） https://www.tachibana-u.ac.jp/research_area/general_academic/iwhc/publication/pdf/chronos_41.pdf
阪大待兼山遺跡はレアな存在!? 2000年の昔へ旅する公開講座
http://hotozero.com/enjoyment/learning-report/handai_machikaneyama_iseki/

特色あるアウトリーチ活動
中久保辰夫「作って、学んで、食べて！三度おいしいドキドキ（土器土器）考古学」、大阪大学×大阪ガス「アカデミクッキング」、大阪・大阪ガスクッキングスクール千里、2016年10月23日
中久保辰夫「考古学からひもとく日本食器文化」、二頁だけの読書会、大阪・ビジネスプラザおおさか、2017年３月28日
中久保辰夫「ジュニア考古学者養成講座　土器の欠片（カケラ）は歴史のONE PIECE」、大阪中学生サマー・セミナー、大阪大学埋蔵文化財調査室・大学院文学研究科、2017年7月29日
中久保辰夫・西村公助「布留遺跡から八尾へ―大和と河内の物部氏―」、歴史ウォーク「大和の中のヤマト―バスで訪ねる文化遺産―」、天理市観光協会、2017年９月30日
中久保辰夫「みき考古学入門講座　土器のカケラから年代がわかる」、2018年8月19日
中久保辰夫「みき歴史資料館企画展「志染町の遺跡」展示解説」、2018年11月23日

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考